

光 文 社 時 代 小 說 文

伊達政宗(二)

長編歷史小說 山岡莊八





光文社文庫

長編歴史小説

だてまさむね
伊達政宗(二)

著者 山岡 荘八

昭和61年2月20日 初版1刷発行

発行者	大	坪	昌	夫
印刷	凸	版	印	刷
製本	凸	版	印	刷

発行所 株式会社 光 文 社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Sōhachi Yamaoka 1986

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70298-8 Printed in Japan

文庫社

小説歴史編長

だ て ま さ むね
伊達政宗(二)

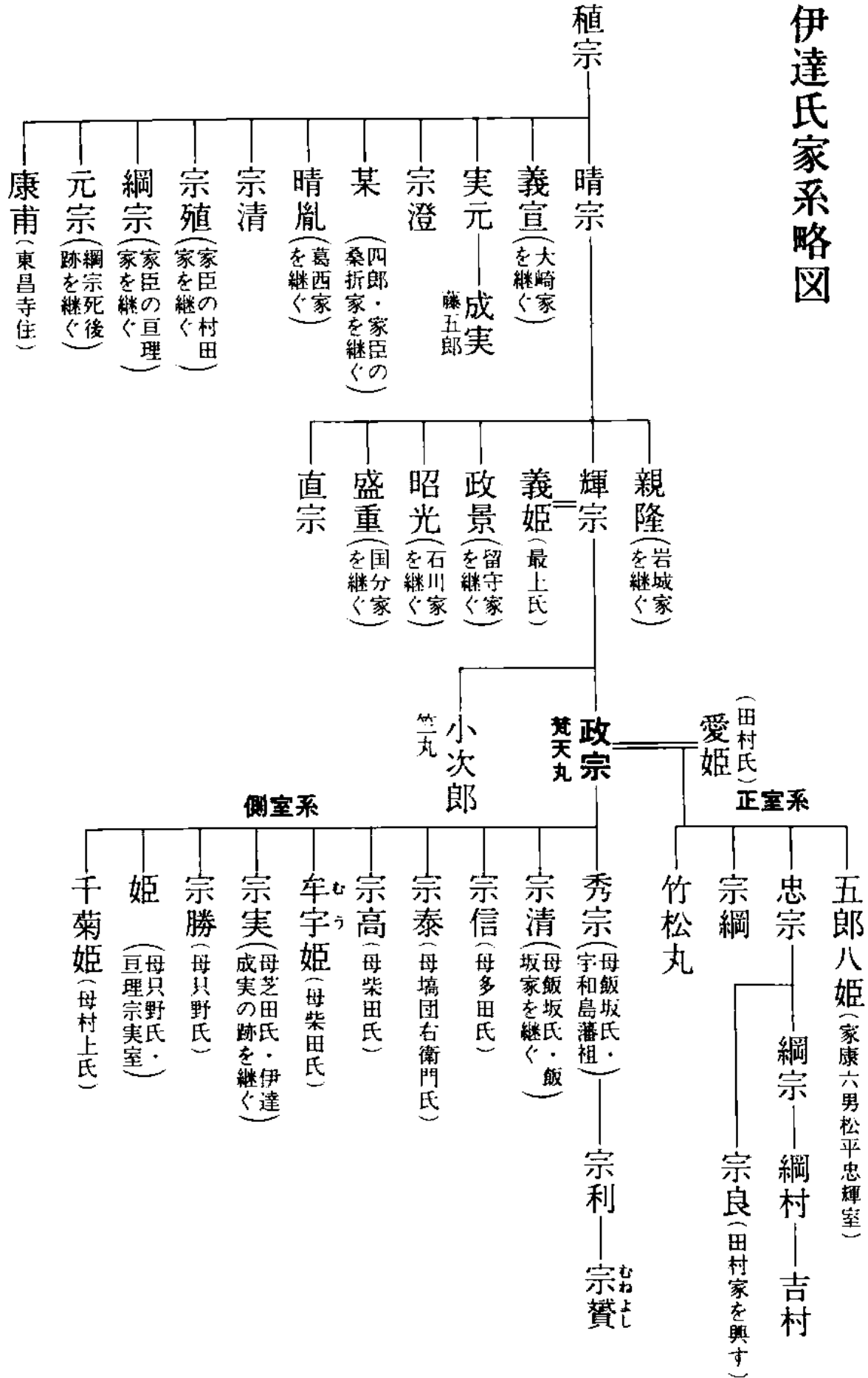
やま お か そ う は ち
山岡莊八



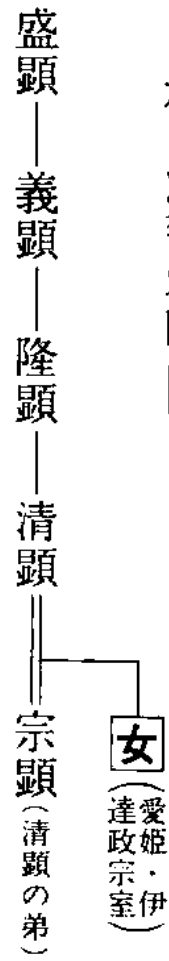
光 文 社

伊達政宗 (二)	
両雄競智	9
黄金十字架	50
人生勝負	90
天地演出	131
伏見の対決	172
蛟竜弄玉	213
天下風船	253
慶長三国誌	294
目次	

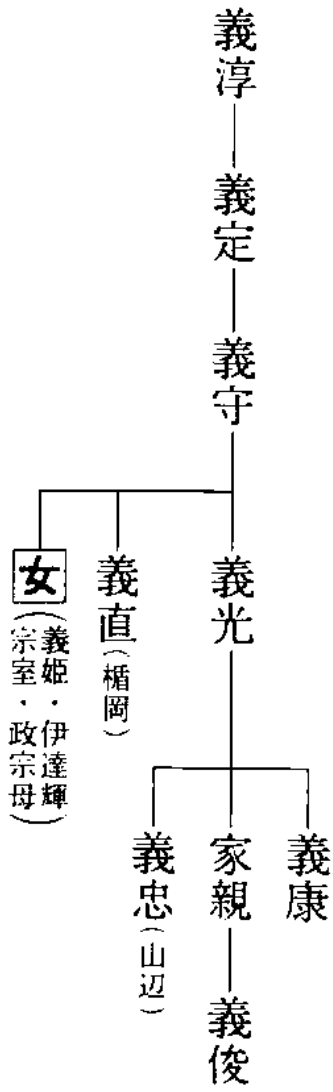
伊達氏家系略図



田村氏家系略図



最上氏家系略図



伊達政宗

卷二

(全六卷)

両雄競智

1

秀吉は激怒して、到着した政宗の一行を小田原に近い底倉に抑留した……という説が、最も多く流布されている。

抑留と決れば、当然、片倉景綱以下は斬死の覚悟を決めて対抗しなければならぬ。したがって、抑留説には、いささか無理が感じられる。

政宗のことだ。当時はまだ石垣山の城は完成して居らず、秀吉の本陣は箱根の湯本にあった筈だから、悠々と底倉を通って、湯本に出ようとしたのに違いない。

戦場近くの兵の動きは、各所から嚴重に秀吉に報告されている。秀吉は、今ごろになってやって来た政宗が、せいぜい百騎になるやならずの人数と聞いて、カンカンに怒ると同時に呆れてしまった。

「いったい、あの小僧め、この戦を何と思っているのか。到着したら有無をいわず素ッ首を引抜いてやるがよい」

そうなる、政宗に好意を寄せる浅野長政は気が気でなかった。

早速密使を送って底倉におしとどめ、そこから延着のお詫びをするよう忠告しておいて、さて、秀吉の怒りを解きにかかった。

実は、この事は、徳川方の記録にも片鱗へんりんをとどめているのだが、秀吉の問責係もんせきが底倉へ派遣される前に、政宗は、家康の第二子で、秀吉の養子として側近にあった結城秀康ゆうきひでやすに会っている。結城秀康は、まだ前髪をおとしたばかりの、素晴らしい鼻息の荒小姓で、

「——政宗の素ッ首ならば、それがしが、ねじ切って参りましょう」
そのくらいのことを秀吉に言ったに違いない。

「そうだ。それがよろしゅうござりまする。向こうも若武者、こっちも若武者、於義（秀康）さまに政宗の下検分をさせるが上分別かと心得ます」

秀吉の激怒にワンクッションをおかせようとして、すかさず長政は助言したと思われる。

「——そうか、於義どのと政宗を噛み合わせてみるか。それも面白かろう」

秀吉は、これで見事に怒りをこえた。すでに戦は長滞陣になっている。都から北政所きたのまんじころに頼んで淀君を呼び寄せているばかりか、お気に入りの本阿弥光悦、後藤光乗、碁打ちの庄林入道、鼓の樋口石見、茶道の千利休、舞師の幸若太夫などことごとく呼び寄せて鬱うつを散じている秀吉なのだ。

はげしい気性の養子の秀康が、叛骨ただならぬ感じの伊達政宗をどう見て来るか？ それだけでも充分面白くなって来たのに違いない。

ところが、肩をいからし、馬を飛ばして出ていった秀康は、その日の夕刻、しきりに小首を傾げながら本陣に戻って来て、

「——でんか様、あやつは不思議なやつでございます」

自分の手には負えないといった顔つきで、奇想天外な報告をもたらした。

秀康が底倉へ着いた時、政宗は絶壁にかこまれた溪流沿いの岩湯にひたって、のうのうと唄を歌っていたという。

「——出て来い、政宗！ 小癩こしやくな奴だ、昼間から」

大声で呼びかけると、

「——そう言うおぬしは何者だッ」

政宗は、見向きもせず首すじを洗っていた。

「——結城秀康！ 名ぐらいは知っておるか」

「——おお、知らいでどうしよう。わざわざご苦勞に存ずる。が、ご挨拶はあとのこととして、ご貴殿も先ず一風呂召さるるがよい」

政宗は、秀康が、秀吉の代理で「到着神妙——」と褒ほめに來たものと信じきっていた。

到着は少々遅くなったが、その代り、奥州へは、秀吉が顔を出しさえすれば、事はすべて順調に運ぶよう、伊達の精銳で要所要所を固めさせて來たゆえ、ご安心ありたいと、ひとかどの手柄顔であったという……。

「——小田原の開城は何日ごろでござるかな」

「——な、な、なんだと!」

「——関白殿下のご威光ゆえ、あと一月は持ちますまい。それにしても、殿下ご秘藏の御曹司おんそうしと、この岩湯の中で互いに辜丸ふぐりを見せ合えるとは思いません。いや、楽しい! ご覧のとおりまる裸ゆえ、ご用心は無用になされ、まず、一汗流されよ」

聞いているうちに、秀吉の額にはみるみる痼筋が浮き上がった。何のことはない、秀康は、政宗にからかわれて帰って来たのだ。

(相当なしれ者じゃぞ!)

「——それで、於義どのは、そのまま尻っぱを巻いて戻られたのか」

「——なんの! 挑まれては後へは引かせぬ」

「——そうであろう。於義どのは、このでんかのお倅だからの」

「——そこで、於義も具足をぬぎ捨て、丸裸で湯に入りました」

「——よかろう! それで、一つや二つはへこませて来たのだな」

「——ところが、中で賭に負けました」

「——なに、賭をしたと!」

「——はい。入ってみると、湯壺の隅に、政宗と並んで四、五尺ほどの青大將が一匹、湯治に来ていました」

若者の話は、どこへ飛ぶかわからない。秀吉は、とうとう笑い出した。

秀吉だけではない。その夜の伽とぎに出て御膳の相伴しやうばんに連なっていた、浅野長政も、前田利家

も、本阿弥光悦も、一斉に笑い出した。

「すると、湯壺の中のお客は、政宗と於義さまと、青大将の三客になったわけで？」
光悦の問いかけるあとから長政も身を乗り出した。

「その賭とは……賭とは何でござりまする」

すると、秀康は、忌々しげに舌打して、更に奇想天外のなりゆきを語っていった。

二人が、狭い湯壺に並んでみると、湯治客の青大将が邪魔になる。そこで、二人は、手を触れずにこの青大将を、どちらが追い払うかで賭をした。

秀康には眼が二つあるのに、政宗には一つしかない。睨めっこなら負ける筈はないと、秀康は眼玉を剥いて青大将を睨みつけた。いや、睨みつけながら、かなり近くまで顔を近づけていったのだが、いっこうに青大将は動かない。

「——よし、では、それがしがやってみる」

今度は、政宗の番であった。政宗はさりげなく立上がると、いきなり男根の頭を軽く手拭に載せて客の前へ持っていった。

「——これ、青大将よ。これが政宗の男の印じゃ。さ、向って来るか」

そう言うと、ゆらゆらと、水面で二ゆすりほどしてみせて、ぐんぐん青大将に近づけた。

青大将は、ぐっと、鎌首をもちあげた。さては、喰いつく気かと固唾をのんだ瞬間に、すると、身をよじらせて岩の上に逃げてしまった。

「——何故逃げたか、ご存じかな」

と、政宗は言ったそうな。

「——青大将の口は横に裂けてござろう。ところが、男の印の口は縦に裂けてござる。こやつは、見たこともない口つきの怪物が現われたと、おそれをなして……」

とたんに、秀吉の怒声が大きく爆発した。

「於義どの、退らっしゃい！」

「は、はいッ」

「男根の裂け口で負けて来るとは何事ぞ。女子の愛しようが足りぬからじゃ。退って御膳を摂らっしゃい」

秀康がびっくりして退ってゆくと、そのあとは爆笑だった。誰よりも秀吉が、腹を叩き、腰をよじらせて笑いつづけた。

2

翌々日、早速底倉に上使が立った。

秀吉は、烈火のごとくに怒っている。小癪な小僧が、関白殿下を侮って、遅れて来て腹でも切る何か、褒められる気でいるとはいいいようもない不屈者。

「——申開きの仕様によつては、軍陣のみせしめ、残らず石垣山に引立てて磔にしてくれる」
しかし、それは、もはやたぶんに秀吉の悪戯だった。秀吉は、誰よりも奇傑を愛し、奇智を愛する。愛していながら脅かそうというのだから、この上使の一行は、前例のないほどのものも

のしいものになった。

秀吉の外務大臣格の施薬院全宗と前田玄以。それに色部右兵衛入道是常、稻葉是上坊、浅野長政、前田利家、利長という秀吉側近の全智をあつめた顔ぶれで、気の小さい者ならば、これだけで逆上するか、すくみ上がるほどの大陣容だ。

秀吉にとっては、たぶん若い秀康の報復をしてやる悪戯どころも含んだ政宗への人物試問隊なのだ。

この七人の上使団を迎えて、片倉景綱以下の人々は顔色がんしよくを失った。底倉がそのまま伊達家を裁く法廷になるのに違いないと思った。

おとなしく裁かるべきか？ それとも、斬死覚悟で先手を打つべきか？

その朝、政宗は、泊っている民家の裏庭の巖上で禅定ぜんじようぜんまい三昧。そのそばに歩み寄った景綱が、「殿、いっそ、今日は、死装束で上使を迎えましては？」

小声で話しかけたが、返事はない。関白も人なり、われも人なり、指図があるまで早まるな。固くそう言われているので、まだ何かあるのであろう、と、景綱はひと先ず引きさがって、逸はなり立つ一行を押えていた。

「よいか、今日が、殿を始め、みな運命の決る日じゃ。指図があるまで、決して輕拳は相ならぬぞ」

そのうち、物々しい警護をしたがえて上使の一行が到着した。景綱は、これをひと先ず民家の座敷に迎えておいて、裏庭へ来てみると、政宗はまだ神妙に坐禅を続けている。